

## ロータリーを若がえらせる、 その根は職業奉仕だ

ききて 神戸C. 平 島 健次郎

(「ロータリーの友」1967年11月号掲載)

——ロータリーの日本化という問題について、戦前のいきさつなどからお伺いしたいと存じます。

はじめて日本化ということがいい出されたのは昭和10年、京都での第7回の第70区大会のとき、折角大勢集まるのだから、前夜に晩餐会をしてロータリーのことを話し合おうと、当時の大会幹事石川芳次都さんが企画されたのです。当夜は100人を越す盛会で、そのとき台北の井手薫会長、大阪の河田嗣郎会長、両氏から「ロータリーの日本化」が発言されたのです。当時は満洲事変から支那事変へ移るときで、国民運動が盛んに提唱され、ロータリーの精神と日本精神をどんなふうに関調すべきか、また世間の批判にどう対処したらいいかということが問題になり、そこから「日本化」という言葉が出て来たのです。国際ロータリーでも中央集権でゆくか、地方分権とするか論議のあった時代でした。当夜は晩餐会の雑談という企画でしたから、次の神戸大会の折に前夜懇談会という名前で、予め各クラブから議題を持ち寄って討議しようということにして散会、翌年の神戸大会へ移るわけでした。ところが昭和11年は2・26事件の年で、5月の大会も延期するかどうか

かという程で、世情も騒然としておりましたし、東京からガバナー事務所の芝さんにも来ていただいて相談しました。各クラブも心配のあまり、議題も提出でき兼ねているらしい。そこで前夜懇談会の委員長で前会長の辻さんから、辻会長のとき幹事をやった私に、議題を用意するようにいわれたのです。

私はロータリー精神をロータリアン以外に広く世間に普及させる必要を痛感していましたからその頃大連クラブで出したロータリーの宣言(96ページ参照)これが日本文としても非常によくできているので、これを、第70区の宣言として、ロータリー精神を一般に普及させるようにしたらどうか、と提案したのです。問題になったのは「宣言」という言葉、それから内容について「これはロータリーの綱領を変えるものではないか」という質疑が出ました。またそれに対して「ロータリーの綱領は英文で決定されている。これは変更ではなく、綱領の日本人向けの説明として受けとっていいのではないか」という意見も出ました。この大連クラブの宣言を推奨されたのが、当時の前ガバナー村田省蔵さんで、「いっそ正式な手続を踏んで、この宣言の意味を綱領の中に含めるよう、国際ロータリーのコンベンションに提案したらどうか」ともいわれた程でした。議論は更に「ロータリーは大体アメリカ直輸入すぎる。この問題以外でも、全体的に日本化する必要がある」とまで飛躍したわけです。意見が相違した割に和やかで面白く、発言者は、私の記憶では、米山梅吉さん、村田省蔵さん、田辺隆二さん、里見純吉さん、黒瀬弘志さん、藤井松四郎さんなどでした。結局里見さんの、「これは綱領の変更ではない。日本人向けの説明資料として取扱うなら差支えあるまい」というとりなしで納得した次第でした。

次に京都から「ロータリーの機構を区本位に変えて欲しい」という提案が出ました。京都クラブでは、当時、国粋団体から激しい圧迫を受けたりジャーナリズムや他の有力な団体からの批判もあった。これは、「ロータリーの本部がアメリカにあり、その指揮命令で動いている」という誤解に基づくらしいから、この際誤解をとくためにも、中央集権的でなく地方分権的にして、区本位の組織にしたらどうか、そのとき R.I.B.I. の話も出まして、これは案外反対がない。米山さんも、大勢を見て漸進的に進める事で賛意を表されたものです。

神戸の前夜懇談会出席者170人程の内、現在ロータリアンとして生存されている方は約30人、手島さん、北沢さん、鳥養さん、宮脇さん、小菅さん、湯浅さん、石川さん、林さん、露口さん、絹川さん、塚本さん、松田さん等々。まあこんな具合でした。

——日満ロータリーとか、芝染太郎さんがゼネラルセクレタリーのようなことをなさっていたのも、その頃のことでしょうか。

芝さんがガバナー事務所を持たれたのは、朝吹さんが事務所を設置された前例をひきついただけです。その後、日満ロータリーが出来たので、芝さんの事務所を、日満ロータリーのガバナー事務所と名称を変えただけです。もちろん満洲、朝鮮、台湾も入っていました。これは前々から70区に入っていたのですが、それを70、71、72と3区に分け、その連合体を日満ロータリーと称したのです。芝さんの事務所は丸ビル3階にあって、一切を芝さんがきりまわしておられたのです。

——日本のジョージ・ミーンズみたいに……

ガバナス・レターも事務所で作りましてね。村田さんのときはご自分で書いておられたのですが、朝吹さんのときから芝さんが書くようになって、特にガバナー自身のサインが必要なものはサインしましたが、普通は、ガバナス・セクレタリーのサインでやっておりました。

——そういうオーガニゼーションと申しますか、それを R.I. も認めていたわけですか。戦後、復活するとき、ジョージ・ミーンズが「そういうものを作られては困る、クラブは R.I. に直結すべきだ」と強調しておりますが……

あのときは R.I.J.M. という R.I.B.I. 式の提案も出た程でしたが、それでは困るということで、作らないという条件で日本のクラブの復活が承認されたわけです。R.I. が日本に許可すれば、ほかからの要求も容れなくてはなりませんから、芝さんも R.I.J.M. 案を引っこめることにしたのです。別府の大会では、その論議で揉めましてね。

——日本化というのは、やはりプリンシプルをある程度日本化することで、ロータリーの日本での普遍化を計るというわけですか。

そうですね。戦前におけるロータリーの日本での受けとり方は、やはり一つの外来思想、たとえば昔の仏教や儒教やキリスト教のような、一つの思想としてですね。従って、ロータリーの目的は何か、それが論議の主題になりました。仏教や儒教、あるいは日本的な思想との関係、たとえば二宮尊徳の報徳思想との類似などにも言及されるなど、ロータリーの目的綱領の研究討議が盛んに行なわれました。He profits

most who serves best. など殊に論議の対象となりました。戦後はむしろ運営面、テクニックがよく受け入れられ、根本問題は自明のものとしてされているわけですが、初めは根本問題の究明が例会でも盛んにとりあげられたものです。

私の考えでは、旧幕時代の士農工商という思想の名残りで、明治に入って工商業の社会的地位が向上したにもかかわらず、思想的な根拠をつかみ得ないままになっていた。そこへロータリーの思想が入って、その職業奉仕という理念が職業倫理の基礎となる思想的根拠を与えてくれるのではないか、という期待を持たせてくれた。そこで商工業者が倫理の向上と誇りを養うものとして、奉仕の理念が研究の対象となった、そう思うのです。

特に印象深かったのは当時横浜の会長だった有吉さんが「世界には仏教国、回教国もある。キリスト教必ずしも全世界に通ずるとはいえない。それよりも、ロータリーの奉仕の精神こそ宗教的相違を越えて普遍的な指導精神となりうるものだ。」と力説されたことで、ロータリーの魅力もまたそんなところにあったわけで、ともかく戦前の論議には根本理念の研究が多かった。現在は運営面のこまかいテクニックが論議されていますが……

—現在は R.I. の事務局も完備され、人員も増え各自役割を受け持たされて役員になったりして、事務的な仕事も多い、そんな関係もありますね。

戦前は飛行機便がないから、返事がくるのに2カ月もかかる。のんびりしていたわけで、根本問題に論議が集中できた。ですから奉仕の精神について、戦前の人によく研究され理解されていました。最近の

ロータリアンにはこれが欠けています。もっと根本的なディスカッションを希望します。

—現在、ロータリーは世界情勢を反映して、一つの曲がり角に来ているようです。世界社会奉仕などもそのあらわれの一つだと存じます。

私は、ロータリーというアメリカから与えられた美しい花束も、しっかりした根を下ろすようにしないと枯れる恐れがある、ロータリーを若がえらせるその根とは、職業奉仕だと考えるのです。多方面に手をひろげるより、自分の職業を真に社会の役に立つように努める、これが根本的な使命で、今日の商業道德の低下、たとえば誇大広告とか、表示と実物の内容が違うなど欺瞞的な金儲けが多い。これを是正し職業倫理の向上を計るのが、ロータリーの使命だと思う。

また、世界社会奉仕、国際奉仕というような仕事は、ロータリアン個人個人の、国、人種、宗教の相違を越えた親善と理解とから始まるもので、団体としてするのは、政府とかその他の機関に委ねるべきだと考える。個人としては世界社会奉仕的精神を持ち、支援し協力するのは非常にけっこうですけれど、ロータリーとしてはまず自分の足元に解決すべき根本問題がたくさんあるわけです。

—この間、イギリスのガバナーがきて、日本とイギリスのロータリーの考え方の違いを指摘していましたが、R.I.B.I. というのはある程度、オン マイ ウエイというところがありますね。日本のロータリーは、R.I. の指導要領どおりやっけていて少し形式的すぎるような疑問もあるわけですが。

民主的な運営方法にも、状況に応じて二つのやり方がある。クラブ数の少ない場合はイギリス式に、地区ごとに機関を置いてクラブと相

談しながらやることができます。しかしクラブ数が多くなるといちいち相談するわけにいかないの、会長や理事長を民主的に選んで、その方針に従う。多少独裁的になりますが能率はいい。本質的なことをあまり考えなければ、R.I. の方針どおりやって、クラブも会員もふえる、運営もスムーズにいく、というわけで、能率的な面があらわれているのが現状でしょう。

—日本は大体、昔から指導者を仰いで逆らわぬ国民性を養われていますから、R.I. 本部からみれば指導し易く模範的なものに見えるでしょう。外国だと、それ程拘子定規でなく、自分でよいと考えたやり方でやるところもあるわけです。

主体性が乏しいことになりませんか。

—今度、地区拡大委員が設けられましたが、新クラブ創立には、テクニックの指導よりロータリー精神を根本的に植えつけることが、第一義の大切な問題だと思っておりますが……

綱領でも、書き物を渡すだけでなく、根本主義を説明し納得させる必要がありますね。戦後もよく初めの頃は屢々、He profits most who serves best. などについて疑問や意見が交わされましたが、近頃は殆ど出ませんね。根本的な問題をもっと論ずる雰囲気をつくる必要がありますね。

—ひとつには文献邦訳に問題があるようです。主旨が、英文のほうがぴんとくる場合が多い。精神を捉えて的確に伝えることが、翻訳の難しいところで、なまじ捉えそこねると大変ですから、原文に忠実となるわけですが、これがうまく伝わっていますかどうか。内容がテクニックに関する場合はそれほどの困難はありませんが。

定款とか細則とかマニュアルなどは原文忠実がよろしいけれど、定

款などにふれない文章はくだけた訳でいいのじゃないかと思えます。

—そうすると、翻訳というより、主観が入ったり、ダイジェストになり勝ちで、そこにも問題があるように思えます。分区代理についても、原文では、「When, Who, What」。訳して「いつ、誰が、何を」となると感じが非常に弱まる。実はこれが標題で、内容には、ガバナーがいつグループ・リプレゼンタティブをセレクトするか。どういうふうにやるか、その What とは何か、ということが書いてある。邦訳だとこの強調が感じられない。ピンとこないわけです。

それは会長のターゲットにも感じられます。あれもむしろ「ロータリーの本領を發揮せよ」とでもしたほうがピンとくる。membership を資格としたのでは、わかりにくい。

—“資格を有効に”ということでしょう。

会長のターゲットだから意識するわけにはいかぬでしょうが、もっと判りやすい日本語訳で願いたい。「資格」もそうですが、「参加」これは involve でしょう。判然とし兼ねるわけで日本化も手始めとしてこんなところにあると思います。

—ではこのへんで、どうもありがとうございました。